

十勝岳連峰トイレ事情

- 美瑛富士避難小屋周辺を中心とした実情報告 -

内藤 美佐雄（美瑛山岳会 事務局長）

「ウンチ街道」。大雪山国立公園南部にそびえる十勝岳連峰の避難小屋周辺の登山道は、登山者の間でこう揶揄(やめ)されている。(01.11.22 北海道新聞 汚れる大雪-どうするトイレ対策)

大雪山国立公園内の山岳のうち、行政区域が美瑛町に属するのは、十勝岳からトムラウシ山、忠別岳、白雲岳を経て白雲沢(融雪沢)までの分水嶺西側一帯となっている。登山口や旧営林署の事業区域の関係で、歩道整備や遭難救助など美瑛山岳会が主に関わってきたのは、十勝岳から銀杏ヶ原、クワウンナイ川周辺までであり、今回はその範囲内におけるトイレ事情について報告する。

1. 美瑛富士避難小屋周辺の状況

美瑛富士避難小屋

昭和28年「美瑛登山小屋」として林野庁が現在地に建設。平成7年9月に強風で倒壊し、翌年8月にプレハブを補強した軽量鉄骨造平屋建(27.0㎡)の小屋を美瑛町が予算措置して建設した。計画時にトイレの併設も検討したが、し尿搬出を主とする維持管理経費がネックとなり、トイレの設置は見送られた。

避難小屋利用状況

美瑛富士登山口入林記帳簿による登山者数は、夏山シーズン中過去3年間とも600名前後で、約50%が小屋泊まりとなっているが、昨年実施したモニタリングの小屋宿泊者カウント数は9月7日時点で430名なので、他の登山口から入山した登山者を含め、シーズン中の利用者は500名程と推計される。

し尿の範囲と汚染状況

美瑛富士避難小屋の定員は実質15名前後なので、週末は小屋をあてにせずテント泊する登山者も多い。また、登山口駐車場から小屋まで5.9km(約3時間半)あり、日帰登山者も休憩時に小屋周辺で用を足すことを考えれば、相当数のし尿が累積されているのが実態である。

小屋北東側の短縮路周辺の花畑は、目隠しになる物がないため汚染はないが、小屋西側を中心にトイレに向かう踏み跡が数条でき、登山道沿いにティッシュが点々とし、否応なく登山者の目に入ることから、冒頭の「ウンチ街道」と称されるゆえんとなっている。

一昨年、小屋300m下流の沢水を調査したところ、亜硝酸反応が若干高く、COD(科学的酸素消費量)反応ではかなり汚染された水であるとの結果も得ている。

2. 十勝岳避難小屋周辺の状況

十勝岳避難小屋

十勝岳噴火口から硫黄を採掘していた時期の昭和 33 年、火口付近に 25 名収容の山小屋(シタダハウス)が建設されたが、昭和 37 年 6 月の噴火で埋没した。現在の避難小屋は昭和 43 年に建設、北海道開拓 100 年の年にあたったことからドアと窓で 100 をデザインしている。建設当初からトイレは併設されてない。

避難小屋利用状況

十勝岳望岳台口からの登山者は、国立大雪青年の家研修生等の集団登山も含め、年間約 10,000 人程と推計されているが、登山届記帳施設の不十分さもあり町の関係部署も正確な登山者数を把握できないでいる。

避難小屋の建設は、昭和 30 年台後半から頻発した冬山遭難に対応する目的があったようで、夏のシーズン中は、小屋で宿泊する登山者は少ない。

し尿の範囲と汚染状況

十勝岳本峰登山コースは、目隠しとなる樹林や小沢もほとんどないため、女性登山者などは、尿意をがまんしつつ望岳台へ下山を急ぐという例をよく見かける。青少年の集団登山サポート経験も多いが、炎天の下トイレへの不安から水分の補給を控えたため、障害が発生したという事例もあり、自然環境保全とは別な意味でトイレの必要性が認められる。

十勝岳スキー場が閉鎖され、望岳台までの除雪も休止している近年、冬山で小屋を利用する登山者も少数なためか、春先に目についた小屋周辺のティッシュの痕跡もほとんど見られない。

3. その他の野営指定地の状況

オプタテシケ山双子池野営指定地は、特定の箇所にティッシュが見受けられるものの、野営する登山者の絶対数が少ないため、現在のところは自然浄化の範囲内かと判断される。この野営地の課題としては、過去から繰り返された埋め立て空きビン、空き缶、ビニール・プラ系「登山廃棄物」の処理である。雨水や雪解け水で野営地の表土が洗掘され、これらが露出してきているからだ。

指定された野営地ではないが、ユウトムラウシ川源頭の三川台もサイトとしての利用が近年増加している。上俵真布から扇沼山を經由してトムラウシを往復する登山者やとむら南沼指定地の混雑を避けて、ここまで移動してきているパーティーである。森林管理署が上俵真布林道ゲートの鍵の貸し出し数を限定しているが、テント設営に伴う裸地化や用を足すための植物の踏みつけが懸念される。

また、入溪が規制されているクワウンナイ川では、規制前には見られなかった焚き火の跡が、奥二股上流の源頭付近まで数カ所点在しており、登山者の生理現象以前のモラルの問題ともいえる。

4．地元自治体、山岳会の対応

昨年 9 月上旬、「山のトイレを考える会」並びに「道央・道北地区勤労者山岳連盟」の会員 33 名が美瑛富士避難小屋周辺の清掃登山を実施した。担当会員の方が札幌から数度美瑛町に足を運び、関係機関と調整をしていただいたこともあり、実施後に「地元としてできることに取り組む」ため、町商工観光課担当者と協議をすすめた。

まず、美瑛富士登山口入林記帳簿の目標とする山を調査した結果、小屋宿泊者の 80% はオプタテシケ山、美瑛富士、美瑛岳～十勝岳を目標とした一泊程度の行程を組んでいくことから

- ・「携帯トイレ」の携行啓発と小屋内に配備し利用の促進を図ることとしたうえ、白金温泉にも専用回収ボックスの設置を検討すること。
- ・美瑛富士登山口駐車場の簡易トイレ設置を森林管理署に要望すること。

「携帯トイレ」については、後日の公園指導員会議の際、上川支庁担当者から現在のよう無料配布は早晚見直しされるだろうとのコメントもあり、将来とも必要数の確保は困難とも考えられるが...

5．報告のおわりに

美瑛町内の登山口は、旭岳や黒岳のようにロープウェー等が通じておらず、美瑛富士避難小屋や野営指定地の利用者も公園内の各施設と比較し、決して多くはない。活火山として噴火を繰り返す十勝岳は防災関連事業が優先され、利用者の視点で環境保全施策が実施されることは少なかったといえる。

地元自治体や山岳関係者も小屋周辺のし尿対策については憂慮しつつ、問題解決を先延ばしにしてきた経緯がある。十勝岳連峰の避難小屋の所轄が林野庁であることも一つの要因であろう。黒岳石室を含めた公園内の山小屋管理を事業執行者に一元化するなど、いずれ「環境」の名のもと事業の統合化を図ってもいいはずだし、時代は明らかにその方向にあると思う。

国立公園指定 70 年を迎える大雪山が、様々な問題を抱えながらも自然のまま後輩に伝え引き継いでいくため、十勝岳連峰の裾野美瑛で組織する山岳会として今後とも微力を尽くしたいと考えている。